

## 第6回 記者懇談会実施要項

- 1 開催日時 平成9年3月3日(月)  
午後3時から
- 2 場 所 100周年記念会館第2会議室
- 3 懇談内容
  - (1) 若手研究者の研究テーマとその成果の中間発表(15時~15時30分)
    - 商学部教授 高橋 望  
研究テーマ「国際ハブ空港の機能と性格」
    - 工学部助教授 坂野 昌弘  
研究テーマ「300年橋の疲労設計について」
  - (2) 学内情報(15時30分~16時)
  - (3) 情報交換(16時~16時30分)
- 4 関西大学の出席者
  - 石川 啓 学長
  - 月岡利男 広報委員長
  - 鈴木俊光 教学部長代理
  - 高橋 望 商学部教授
  - 坂野昌弘 工学部助教授
  - 北村 博 企画室長
  - 荒木紀忠 広報課長
- 5 配布資料
  - ① 記者懇談会実施要項
  - ② 高橋 望教授の発表資料
  - ③ 坂野昌弘助教授の発表資料
  - ④ 1997年度入学試験
  - ⑤ 卒業式・入学式
  - ⑥ 博物館開館3周年記念展示会
  - ⑦ '97スプリングフェスティバル
  - ⑧ 図書館展示会
  - ⑨ 「哲学の周辺」渡辺幸博著
  - ⑩ 「関西大学通信」第251号

以上

## 「国際ハブ空港の機能と性格」

商学部教授 高橋 望

〔概要〕 経済的規制が撤廃された米国国内航空で開発されたハブ・アンド・スポーク (Hub & Spoke) 型路線ネットワーク・システムは、国際航空の領域でも展開され、「国際ハブ空港」が登場するに至った。しかしその場合、二種類の「国際ハブ空港」があるように思われる。一つの事例は94年に開港した関西国際空港で、国内線と国際線の乗継ぎによる「内陸ハブ空港」である。これに対し、シンガポール・チャンギ空港のような自国発着需要の乏しい国では、国際線相互間の乗継ぎ空港として、「国際ハブ空港」の機能を果たそうとしている。そして現在アジアの周辺国では、競って大規模国際空港の整備が戦略的に進められている。それは、将来にわたって一層の経済成長を支えるために必要なグローバルな交流の増強を意図したものである。こうした中で、わが国における国際空港の果たすべき役割と、今後の「国際ハブ空港」の整備のあり方を、関西国際空港を中心に論じる。

### 〔プロフィール〕



たかはし のぞむ  
高橋 望

教授

国際交通論を担当。1956年生まれ。一橋大学大学院博士課程を85年に修了。京都産業大学経営学部を経て、本学商学部には93年に着任され、96年に教授になられた。専門は米国の航空規制緩和政策で、航空・空港関係の論文を多数執筆しておられる。活動の場は学界だけでなく、関西国際空港の開港に際して関西経済連合会空港対策委員会専門部会顧問も務めておられる。

「肩の力を抜いて楽に生きる」がモットーで、そのためクルマはご自分では運転されず、奥様運転の横に楽に座ってドライブを楽しむのが、趣味の一つだそうである。ご自身を「無芸大食」と謙遜されるが、それとても最近では「腹も身のうち」と節制しておられる由。と、はいうものの、奥様からは「ズボンを毎年買い替えなくては行けない」と嘆かれているとのこと。現在、学生主任（二部担当）。

## 「300年橋の疲労設計について」

関西大学工学部土木工学科 助教授 坂野昌弘

21世紀の日本は、人間だけでなく橋などのライフライン・社会基盤施設にとっても「高齢化社会」となることが予想されている。道路橋の場合、高度経済成長期の1960年代～70年代にかけて大量に建設された「団塊の世代」が2010年代から次々に耐用年数といわれている50歳を超えはじめ、2030年代には50歳以上の橋が国内の道路橋の約5割を占めると見込まれている。ただでさえ高齢化社会の重荷を担わざるをえない我々の子孫に対し、その上さらに補修・補強や架替が必要な大量の老朽橋という負の遺産を押しつけるのはあまりにも酷な話である。「子孫に美田」とまではいかなくとも、できるだけ長寿命で良質な社会基盤を後世に残し、膨大な負債を少しでも軽減してやりたいと考える。

従来、道路橋の寿命は漠然と50年と言われているが、その程度しかもたない社会基盤の上にはそれに応じた文化しか育たないであろう。また、設計上50年もつという保証さえどこにもない。土木学会では工学的な永久寿命として300年を想定した橋梁の設計法に関する報告書を取りまとめた。本研究はその中で300年耐用をめざした疲労設計について、その基本的な考え方と300年寿命を保証する応力照査方法を提案したものである。

### 〔プロフィール〕



さかの まさひろ  
坂野 昌弘

助教授

1957年山形県生まれ。81年東工大院修了。群馬大助手を経て本学には90年着任。東北から関東、関西と徐々に南下（軟化?）。授業とゼミの時以外は大変温和な先生である。

専門は構造設計学。88年、道路橋の疲労に関する研究で工学博士。高速道路や新幹線等の橋で生じる疲労破壊の原因究明や診断、対策、新しい設計法の確立などフィールドワークにも強く、若年ながらこの分野の先導者的存在である。半永久的に使用される構造物を相手にされているため、気短な性格が気の長い性格に変わられたとか。

中学では野球部とスキー部、高校から大学院まではスキー部に所属され、スラロームとジャンプが得意種目とのこと。スキー場でのゼミは恒例。関西の構造系大学対抗野球大会では投手で四番。「よく遊び、よく学べ」を理想とされるが、どうしても片手落ちでとほやいておられる。関大着任を機会に断煙。お酒は量よりも味わう方。一男一女の父。